

# 「消える凶器」 航空機から氷塊の落下物か！？



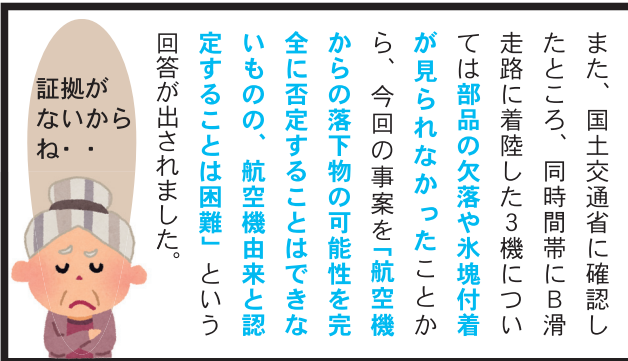
平成 29 年 6 月 6 日・火曜日・午後 7 時ごろ、B 滑走路北側、滑走路北端から約 7 キロメートル地点において、**航空機からの落下物**と思われる事案が発生しました。

なんとここは、知人宅ということもありさっそく現場取材させていただきました。

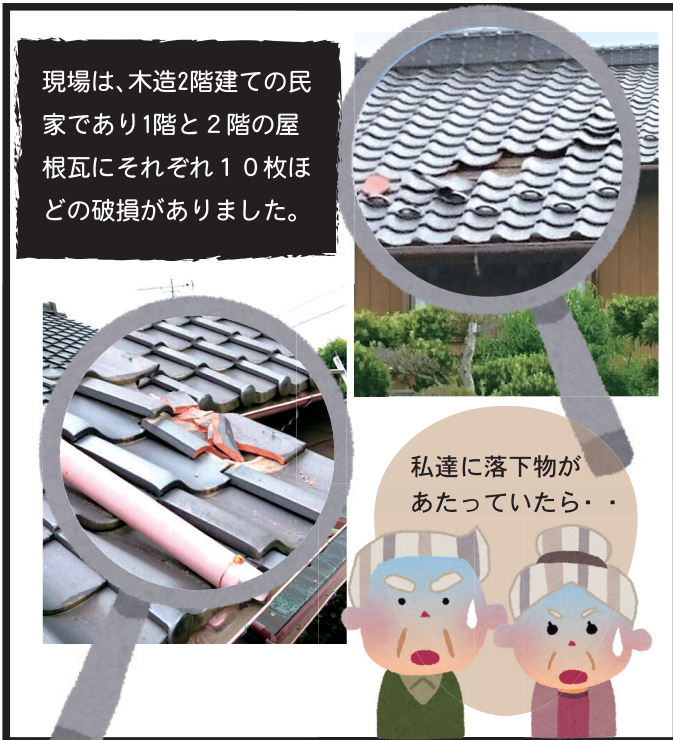
推理小説の有名なトリックの一つに、「**消える凶器**」というものがあります。被害者の死因が刃物による刺し傷なのに、いくら探してもその凶器が見つからない。犯人は氷で作られたナイフで犯行を行い、凶器は現場から溶けてなくなってしまう……



連絡を受けて同日夜に成田市空港部と成田国際空港株式会社（NAA）が確認を行い、また翌日に国、NAA が再度現場を確認しましたが、**航空機からの部品や氷塊と思われるものは、発見することはできませんでした。**



また、国土交通省に確認したところ、同時時間帯に B 滑走路に着陸した 3 機については**部品の欠落や氷塊付着が見られなかったこと**から、今回の事案を「航空機からの落下物の可能性を完全に否定することはできないものの、航空機由来と認定することは困難」という回答が出されました。



現場は、木造2階建ての民家であり1階と2階の屋根瓦にそれぞれ10枚ほどの破損がありました。

私達に落下物があたっていたら……



証拠が見つからない以上、**落下物として認定することができない。** という見解は一面では正しいのかもしれませんが、**しかし** 航空機の離着陸経路の直下であること、**周辺を見渡しても何かが落下してくるような構造物はない** 以上のことからして、**航空機からの落下物であることは免れない** と思います。幸い国が落下物と認定せずとも **NAA** としてはこの事案に対し、**当該住民に十分な対応を講じる**との申し出がありました。今回は人身事故には至らなかったものの瓦を砕くほどの衝撃です。再度、原因究明を求めることはもちろん、**落下物ゼロにむけた対策**を働きかけて参ります。また、四者協の見直し案（内面で解説）で示された落下物対策新制度の早期実施と対象地域の早期移転を求めてまいります！

# WAVE

Shingo Amamiya Narita City Report

Vol.41

成田市議会議員

雨宮しんご



## 国家戦略特区は悪なのか。

獣医学部新設問題の次は  
成田市の医学部新設に波及！？

政治主導で岩盤規制改革を進めてきた国家戦略特区の大きな成果が大学の学部新増設です。

成田市は「国際医療学園都市構想」を提案し、特区事業として2015年11月に医学部の新設が認められました。医学部の新設はなんと1979年の琉球大医学部設置以来、実に38年ぶりです。

千葉県の医師不足はともかく、県の人口10万人あたりの医師数は182.9人で全国45位。看護師に至ってはワースト2位という状況でした。それでも日本医師会は真つ向反対し続け、第140回日医定例代議員会後の記者会見において改めて反対意思を表明し、さらに、世間を騒がせている良からぬ忖度があったのではないかと発言をしています。

学部新設において、国会で厳しく追及されているのが学校法人加計学園（岡山市）の獣医学部新設をめぐる事案です。首相と学園長との親交が取り沙汰されている学園に、獣医学部新設が選定されたのは、そこに忖度が働いたのではないかというものです。獣医学部新設はなんと52年ぶり。獣医師会は「反対」の意を示しており、これは医学部新設と全く同じ構図です。もちろん、決定までのプロセスの可視化は必要だと思います。ただ、本当に明らかにすべきは高齢化で医師不足が明らかなのに、40年近く医学部の新設が認められなかったことではないでしょうか。

規制改革こそが成長戦略の「二丁目一番地」です。政治主導でなければ進められなかったこの岩盤規制の打破、この流れは止めてはならないと考えています。

# 成田空港のさらなる機能強化の新たな提案が示されました。

昨年9月に国、県、空港周辺市町、NAA（空港会社）による協議会が開催され、3本目滑走路の新設、B滑走路の1000m延長、夜間飛行制限の緩和を軸とした機能強化案が示されました。これを受け市町では100回以上の住民説明会を開催、延べ約5,000人の住民の方々と意見交換を積み重ね要望をまとめました。

## 要望内容

- ・夜間飛行制限緩和の一部見直し
- ・集落分断を生じさせない移転区域の設定
- ・落下物対策
- ・地域のインフラ整備や地域振興策の検討

こうした要望に対し、国、県、NAAはこのほど、新たな提案を示しました。

### 当面の運用と、夜間飛行制限の緩和の見直し

- ・運用時間を従来案5時～25時を改め、6時～24時までと縮小する。
- ・2020年の東京オリンピック・パラリンピックまでにA滑走路で実施する。
- ・24時から24時30分までの「カーフュー弾力的運用」を認める。
- ・B滑走路は現行通り6時～23時までとする。
- ・22時台の10便規制は撤廃する。

年内?

### 第三滑走路(C)運用開始後の運用

- ・運用時間を5時～24時半までに拡大する。
- ・24時30分～25時までの「カーフュー弾力的運用」を認める。
- ・A・B・C滑走路の運用時間を6時30分～24時30分、5時～23時で定期的に入れ替える「スライド運用」を導入する。  
→6時間の静穏時間を確保、騒音影響を分散する。

10年後?

### 環境と地域共生策

- ・周辺対策交付金の一部を「地域振興枠」として優先交付。
- ・落下物多発地域に「航空機落下物被害救済支援制度」を創設する。
- ・防音工事は従来のペアガラスに加え、浴室や洗面所、トイレも外郭防音工事の対象。
- ・騒音地域の線引きは、集落分断がでないように柔軟に対処する。
- ・寝室内窓は、家族の人数分の部屋数に実施する。
- ・寝室の壁や天井の防音工事が未実施の場合は、防音工事を実施する。
- ・5時台と23時以降の航空機は、低騒音機(B787、A380など)に限定。

年内から順次?

以上、騒音地域住民の皆様の声を限りなく反映しながらも、成田国際空港の発着回数50万回を実現する提案が示されました。羽田空港の機能強化が着々と進む中、成田空港の機能強化もスピード感をもって進めていかなければなりません！そのためにも、騒音地域住民に寄り添った対策を講じていただけるよう、声を上げてまいります！！

雨宮真吾事務所

〒286-0018 成田市吾妻 3-48-28  
TEL・FAX/0476-37-7608

■1978年10月31日生まれ(38歳)  
■平成19年 2651票で初当選  
■平成23年 4079票で2期目当選  
■平成27年 4526票で3期目当選  
■教育民生常任委員会・医学部設置特別委員会  
■日本サーフィン連盟公認インストラクター

info@ama-shin.net  
www.ama-shin.net

活動日記を更新中！！

雨宮しんご

検索

## 成田市行政の原動力！市職員の環境整備を！（一般質問より）

成田市に限らず自治体行政は、自らの責任で多様な市民の要望の中から緊急度の高い政策を選び出し、限られた行財政上の手段を最も効率的に利用配分し、市民の利益の最大化をはかる努力を積み重ねていかなければなりません。そして、これらを実践するのが自治体職員のみなさんです。地方行政の可否は、自治体職員の働きに大きく左右されますので、組織として、職員がその資質を十分に発揮できる環境が必要であり、もしそれが不備な状況であるならば、それを整備することが優先課題となります。わたしは今まで、成田市の政策課題について論陣を張ってきましたが、今回の一般質問では、政策推進の原動力である成田市職員の皆さん人事体制にフォーカスし、人事評価や勤務環境の整備、それに昇給の考え方や業績評価について取り上げました。真摯な答弁を得ることができましたので、引き続き注視してまいります。

# 国際医療福祉大学「医学部」の状況は！？

6月議会では2020年に開院予定の医学部附属病院用地の取得案件が可決されるなど急ピッチで進捗していますが、あわせて医学部の入学者状況などについて報告されました。

### ■市内事業者への発注機会を！

わたしは、商工会議所などの協力を得て市内事業者の方々と大学側とのマッチングを企画するなどに、市内事業者への工事発注を市や大学側に要請してきました。現在、国際医療福祉大学関連に対して市内94事業者が携わっているとの報告がありました。市内事業者育成の観点から、今後も積極的に市内業者を活用いただけるよう働きかけてまいります。

### ■医学部入学者、県内から約10%が入学（成田市からの入学者なし）

定員140名(内外国人20名のうち、千葉県内の高校出身者14名となりました)。

### ■職員、学生の市内居住状況は38%。

医学部、昨年開学した2学部5学科の生徒数は867名で、学生の市内在住者は328名(医学部生は140名中73名が市内居住)です。教職員は市内居住者89名、市外居住者146名であり、教職員と学生を含めた1102名の市内在住率は38%となります。

開学したばかりですが着実に効果が出始めています。2020年の附属病院開学以降はさらに加速することが期待されます。人口増や市内事業者の工事受注といった直接的な経済波及を促せるよう引き続き努力するとともに、地域医療との密接な連携についても、具体的な議論を進めていかなければならないと考えています。